千島の思出（XI）

舘脇操

松輪島

一島一火山より成り、しかもそれが端正な富士型の火山であり、相當な高さを有するとなると、千島でもその數が少く、松輪島と阿頼度（アライト）島とがその代表的なものになろう。前者は芙蓉岳（一名松輪富士）（一四八五メートル）が島であり、後者は阿頼度富士（二三三九メートル）が島である。芙蓉岳は一九二八年と一九三〇年に爆發をなし、その後しばらく頂上附近から白煙をあげていた。松輪島は羅處和島から北東に一六浬離れ、東北には雷古計（ライコケイ）島がある。

この島は長さ一二キロメートル、幅六キロメートル、北西の方向にやゝ楕圓形をなして横たわり、芙蓉岳は中央よりやゝ北に偏している。森林としてはミヤマハンノキ林があるのみで、それも山麓帶にしかも灌木狀である。高山帶の草本として最も高所に行くものの代表的なものはタルマイソウで、時に八〇〇メートル、時に五〇〇メートルに達し、又それより以下のこともあり、爆發に影響された南斜面の方が草本が高所までのぼつている。海岸線を見ると、南には礫濱が多い。

私がこの島を訪れたのは、一九二八年の九月初旬で、三日に上陸、五日には芙蓉岳に登攀、六日には西側のアイヌ灣に行き、七日には盤城島に行き、十一日まで大和灣附近をさぐつた。一九三一年には五月二十四日五日の兩日、六月七日に大和附近を踏査した。

1. 大和灣

大和灣は港らしい港のひとつもない中部千島においては、比較的よい錨地になつている。丁度松輪富士の南西にあたり、東方には台地狀の盤城島をおき、北には池田岬の凸出があり、南には鵜嶋が出ており、長さ五メートル、幅一・二キロメートルまず〳〵船は安心して淀泊できる。大和も盤城も今はかなや軍艦の名で、兩者ともこの近海の測量をなしたものである。

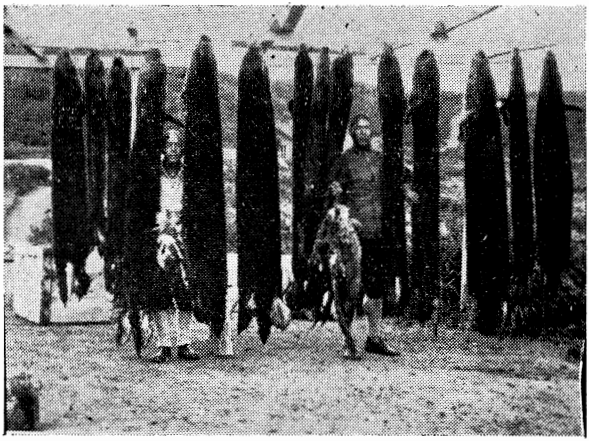
大和灣は農林省でも中部千島の一基地として、越年舍も中部千島の他島(新和島ブロトン灣を除く)より大きくガッチリとしたものを二棟置き、その他に中部千島で蒐集した假仕上げの毛皮を晩秋まで集積する倉庫を持つていた。木造とはいいながら、内部は濕氣を防ぐようによくできていた。

ここで最も豪勢であつたのはラッコの皮の集積、多い時には十五枚ぐらいもあつた。「どうせ高嶺の花」とは思いながらも、その感觸は北海毛皮の王者たる風格を充分に備えていた。その當時の一寢數万兩の夢、私のどこかに秘んでいる野次馬性が首をもたげ、これをちよいと結んでみたいという豪華なまどろみを試むべく、こつそり懇願に及んだ。そこでこの貴品的毛皮にかこまれた一刻の晝寢が許可されず默認された。私は倉庫の二階にあがり、高價極まる毛皮の中にわけいつた。場所はその時代の彼の最も好んだ孤愁の高い絶海の小島、しかも誰もいない靜閑の室、その周圍はその時代の彼に許される範圍としての最高の贅澤品にかこまれて來ると、すつかりお購立はできたのだ。しかしなかなか眠りに落ちにくく、さてまどろんでもその眠りは頗る健康的で、何の夢さへ見なかつたことを記憶している。

大和灣

九月上旬私達がそこに滯在している時には、よくカムチヤッカ歸りの發動機船がここに水をもらいに寄つて行つた。よく陽燒した赤銅色の顏には、逞しい潮風の香がしみこみ、無性髭は伸び放題に伸びていたようである。厚い胸、頑丈な手。一見獰猛そのものに見えるが、しかし越年舍に訪ねた時の挨拶や物腰は實に靜かで鄭重である。そして中には二ヶ月も風呂に入らず、ここに風呂をもらつて無邪氣な歡喜の聲をあげてゆくオッサンもいた。

札(サツ)の通用しない島ではやはり人の心が物をいい、人の情が物を語るのである。そして青菜のお浸しに數ヶ月振の新鮮な野菜を味い、高らかに舌鼓を打つて行つた。



集積されたラッコの皮

大和灣では九月に入つてから松輪神社の祭をやつた。これは別に祝詞をあげるのでもなければ、太鼓を鳴らすわけでもないし、笛ひとつ吹くわけでもない。唯そこわとなき神社に、祭の「のぼり」がたつだけなのである。それでいて二家族だけの島守が、着換えをして嬉々とした子供を中心にお祭氣分になるのだから、不思議なものだ。赤飯、にしめ、そして酒、子供達にはおはぎ、神社にお詣りに、そこには颯々と秋の風が吹きわたつて、「のぼり」がはためき、松輪富士が大らかに立つていた。そして夜には海霧にかこまれた越年舍の中で、「今年も何もなく夏が終えて」と何か特別の祝でもあるように、二家族うちよりいつもよりゆつたりと盃をふくんだものである。

大和灣の生物に別に特徴のあつたという何者もないが、ここのチシマコハマギクは非常に美しかつた。海岸に遊びに行くと、格好な岩の割れ目に格好の純白の花が心を惹き、私は幾度かそれにレンズを向けた。その收獲のひとつが圖に示したもの。またここで注目されるのは、この島がフキハオウブキ）の分布北限であり、オウブキは澤がかつた凹地に單純に聚落を構成していた。最もオウブキはこれより北の溫獅古丹(オンネコタン)の乙女灣にも殘つているが、これは報公義會員が食用として移植したものが、わずかに殘存しているので、今日でもあるかもしれない。海鳥は中部千島のどこにも多か

つたが、ゴメのここぐらい多く集つていたところも少かつたように思う。旅も終りに近ずいた時、海岸に船待ちの日を放心でいる時、無數のこの鳥の群の啼き聲というものは、うるさいというより不思議と何物かの郷愁を誘つた。

チシマコハマギク

2. アイヌ灣

入江といえば入江だが、無造作ないさゝかの曲浦、しかもボートの着き場も比較的よい所が、西海岸にある。五万の地圖で見ると南岸大濱の方が、よい錨地のように見えるが、ここにはどういうものか、農林省の船は着いたことが無かつた。ここでは礫濱につゞく海岸草原から、いきなり四五メートルぐらいの台地が急にそゝりたつている。

大和灣からアイヌ灣へは約七〇〇メートル、始めの一・五キロメートルは磯を傳はるが、そこから高距五〇メートルぐらいの台地にあがり、天蓋山（一二七メートル）と呼ぶ一小丘稜の下の澤を過ぎて、高距六〇～七〇メートルの台地を歩いてゆく。このゆるやかな台地はほとんどイワノガリヤス（アイヌワラ）の禾本草原からなり、火山の裾の軟かな台地草原を吹きわくる秋風は何とも清爽なものであつた。そしてそれにも増して心を喜ばしたのは北にあたつて聳える芙蓉岳そのものであつた。そのスカイラインは端正な富士型をして、噴煙は大空に大地のいぶきを送つた。それが陽に白く光る日など、殊更に北の島なる旅心をそそられたものである。

アイヌ灣近くになつて斜面を下るようになるが、下りきろうとするところにスゲ泥炭かあつた。私達はアイヌ灣の拜み小屋式獵舍で晝食を取り、その磯を歩いたが、そこは平凡なわびしい海岸であつたに過ぎない。風の吹き方によつて、大和灣に荷役できない時にこのアイヌ灣に荷上げし、船はいち早く逃げることも

あるそうだが、こゝに荷物を下ろされて、大和湾に運ぶのは大變なことゝ、島守の生活の一端を見せられたような氣がする。

歸りには南端トツカリ岬に行つてみたが、こゝに行くために、大和灣の中程から三キロメートル近く南東に歩いた。行く限りイワノガリヤスの中を踏けて行くので、まるで自分が放牧馬にでもなつたような氣がした。ここも單一な草原で、變化というものがほとんどなく、歩るくだけ歩るいてきたような氣がする。

3. 盤城島

盤城島は長徑二キロメートル、短徑一キロメートル、大体四角形をなしている。最高點は七一メートルで、島は大體テレース型をして、大和灣東の海上二キロメートルにある。島へ行きたく毎日これを眺めていたが、万一を懸念しボートの使用は禁止されていたので、二キロメートル近くの海上のこととて盤城への渡島はどうにも出きなかつた。

とある日、白鳳丸が入つてきたので、ボートで山本船長のところに行き、モーターボートで盤城島に行くことをねだつてしまつた。この島は上陸するところが一箇所よりなく、島の上にはかなり穴居の跡があり、無數のエトピリがいた。ここでのもくろみのひとつはウミネコのヒナをとること。巣の中にピーピーないている奴のそばによると、本能的に侵入者を警戒して、小さな口をあけ、黄色いとても臭い液をペッペッと吐いてよこす。時には親鳥が上を飛びまわることもするが、いとも悲しげな顔をしている無抵抗者に無慈悲にぽいかり腦天一發をくらわすのだから、多少の勇氣がいる。どうも大の男たち、側隠の情が湧いて杖をあげることができず、一番勇敢だつたのが、納所（ナショ）（坊主）の愛稱ある最年少のT。「どうも人は見かけによらぬもの」と、へらず口をたゝきながら、それでも獲物だけはブラさげて大和灣の越年舎に歸り、その夜はヒナ鳥のつけ焼に舌鼓をうつたものである。

4 芙蓉岳

島の山というものは、特殊な情感をもつているものである。ことに鬱ずむ北の海から端正なスカイランをもつた高い火山は一種の崇高な孤愁を秘めている。私は利尻に行つた時も、阿賴度富士へ行つた時も、そうだつた。

九月初旬の日を選びに選び、天氣に太鼓判を押された早朝、私は學生の德永君と二人、「氣をつけて行つ

て下さいね」という島守の親切な聲を後に―して大和灣の越年舍を出發した。すぐ後の台地にのぼり、一澤越してまたしばらく台地を行つて、陰ノ濱といわれている礫濱に出た。地圖上だと二キロメートルに過ぎないが、小一里歩いたような氣もした。陰の濱で三羽ばかりのゴメが遊んでいたが、人を少しもおそれず、一メートルぐらい近ずいて始めて飛び立つた。島の旅のうれしさが、こんなことにもしみ〴〵感じられた。この磯濱は一キロメートルばかりつゞいたが、その北のはずれの涸澤から登ることにきめ、そして高等植物のある限りを尋ねることにした。一キロメートル餘は涸澤とたどり、それから二二一メートルの測點がある芙蓉岳東北東の一山稜にとつつき、七〇〇メートルのたありまでのぼり、その邊ではこの山稜一帶には花咲く植物のないことを確めた。そして高等植物の限界あたりで、晝食をすませて、慈味にあふれた山のまひるの陽にぬくもりつ、靜寂の憩をゆつとりとつてきた。白煙は秋の空に音もなく流れた。

この日、この登路で海邊近くから、上昇限界までつきまとつたのが、タルマイソウ。一般傾生植物は高山植物的姿態を有するものが極めて散生的に生えているに過ぎず、ミヤマハンノキも一部に見たに過ぎない。

この日得たマメ科の一小草ヒメモメンズルと新稱した植物は千島に未知のものであつた。

5. 島の狐

中部千島。農林省がそう呼んでいた擇捉海峽以北から温彌古丹海峽以南の島々は、ラツコ、オツトセイ保護のために、大正五年から農林省所管のもとにおかれた。そして農林省はこの附帶事業として、優良毛皮生產上必要條件である寒冷と濃霧を有する中部千島の環境を利用し、放牧式養狐事業を經營し來つたのである。即ち土地に自然棲息するアカギツネを淘汰し、優良狐として、銀、黑、十字、紅を保護し、別に大正五～六年に亘り、ロシアより青狐（ロシア青狐と呼ぶ）十五番（ツケイ）の寄贈を受け、露領コマンドルスキー群島から移して保護蕃殖に努力したのである。そして放牧と柵飼とを併用し、柵飼では系統の研究及び飼料榮養の調査並びに寄生病害の學理的研究をなしている。

中部千島における牧養狐をあげるなら、得捉島では十字狐、銀狐、新知島ではカナダ種と千島種との雜種の銀狐、青狐、計吐夷島では十字狐と銀狐、宇志知島では青狐、羅處和島では銀狐と十字狐、松輪島では紅狐、青狐、捨子古丹島、番牟古丹島、温彌古丹島では

紅狐を主としていた。

では牧養の狐をどうしてとつたか、ここで書いておこう。銀狐、青狐、十字狐などになると、鐵砲玉のぬけた後を嫌うので、全部撲殺したものである。島の狐達も雪のない間は豊富な餌によつて滿足きわまる生活を送つているらしいが、越年になると、食糧難におそわれて來る。そこで農林省の方では予め餌を夏の間に島に送りこんでおく、島守は越年近く餌がなくなつた頃に、餌播きに出かける。そして餌播きの範圍を段々に縮少して來て、いよ〳〵雪の頃になると、すつかり小屋の近くにひきよせてしまう。そして狐の毛のよくなつた頃と、食糧難の極とが一致するので、ここで撲殺を開始するのである。しかしこれは頭數無制限というわけでなく、農林省は予め五万の地圖に、全島の親狐仔狐の頭數および生棲狀態を記入させ、足りないところと多いところに比較的均等な按分をやり、適置仔狐の捕獲移動を行い、晩秋に撲殺頭數が指令されてくる。この餌には色丹島や擇捉島から運ばれて來た鯨もあり、北の島でとれた海鳥もある。海馬は早い時國後で食べ、その後北の方で一度御馳走になつたことがあるが、餌の塩藏海馬は如何あらんと、散々塩出して食べて見たが、どうにもくさく、又小さくきつて燒いてウミネコの玉子とオムレツ式にして食べて見たが、これも臭があつてどうにもならなかつた。

（北海道大學教授）

〝魚と卵〟の製本について

誕生二年目を迎えて二十余册にもなる〝魚と卵〟も余程注意しなければ見えなくなるような事があります。そこで今度これを一年分宛製本して一册を見れば一年分全部を讀めるようにしたいと考えまして見本を作らせましたところ、これならよいと云うようなものが出來上りましたので皆樣にもお進めしたいと考えております。

背は皮を使い〝魚と卵〟の字を金で拔いたもので一部が約二百圓程度ですが數が纏まればもつと安くなるのではないかと思いますので御希望の方が御座いましたら手持の〝魚と卵〟を左記係まで御送付の上御申込下さい。

記

札幌市外中ノ島

北海道水産孵化場

魚と卵編集室